

史 談

2010 (H22) 2・25

■ 研究発表会、開催される

この2月20日、町の中央公民館で当史談会の研究発表会が開かれました。

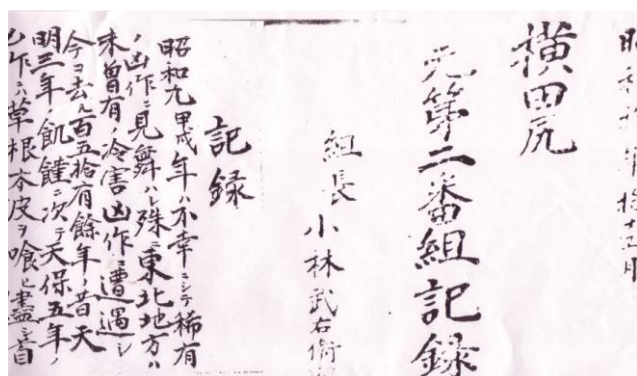
今回は金田茂也氏の「白鷹町の養蚕」と菅野志郎氏の「最上川舟運と幻の左荒線を歩く」の発表がありました。かつては私たちの身近なところにあった養蚕も、いつの間にか周囲では見られなくなり、周辺のことをわからなくなってきました。

また、白鷹町にとっても大きな観光資源である最上川についても、なごやかな雰囲気の中で発表があり、「幻の左荒線」をたどる研修旅行を企画しては？という意見もありました。なお、今回の発表はいずれ会の冊子『史談』にまとめて掲載の予定です。

研究発表会の後には懇親会がもたれ、最上川の舟道の話などで盛り上がりました。(桜)

■ 紹介、資料二点。

ひとつは西田尻の小林家にあった昭和9年の凶作の記録です。この年の稲の作柄や繭の価格に触れているだけでなく、恩賜郷倉や地元の篤志家についての記述があり、今度の『史談』に載せるべく準備をしています。



もうひとつは同じ小林家のもので、明治37年に作られた『西横田尻学校々友会則』という、ガリ版で刷られた薄い冊子。これは教育関係の資料としてもめずらしいものですが、同時にこの年代における謄写版印刷の数少ない資料です。(山)

■ 甲と乙

荒砥に住むSさんは自分の住んでいる地域の字名が、いつの間にか「馬場と石那田」から「甲と乙」に変えられたのが気になり、元に戻してもらいたいといろいろな集まりで訴えている。聞けばもったもな言い分で同情を禁じえないが、これについてはいつの時点から、なぜこうなったかという詳細は今のところわからないままである。一方で物事には符号を使って他のものと区別し、順序をつけないと整理ができないという側面もある。人に名前があるようなものである。

「甲と乙」も元はといえば「甲乙丙丁・・・」と続く、いわゆる「十干」の始まりで「十二支」と組み合わせて暦に使ってきた、単なる符号である。ただそこに優劣をつけた価値観が入り込んだのが問題なのだろう。かつての通信簿では「甲と乙」では甲が優れているとされたし、兵隊検査でも「甲種合格」は近所でも評判になり、憧れの対象だったという。だがそこから「差別」が生まれ、様々なトラブルや行き過ぎた行為の元になったともいえる。それらの名残ではあるまいが、この種のものは、司法や各種の資格、賃貸関係の文書に今でも見ることができる。

そこで「甲と乙」を符号と考えると、これに変わるものをいろいろ考えてみた。やはり「123」や「ABC」では色気がないから、まずは「鶴亀」か「松竹梅」。つぎは「前後」か「左右」か「裏表」。さらには「大中小」に「上中下」、「○△□」もある。「紅白」や「白黒」がいやなら「金銀銅」はどうか。それとも宝塚みたいに「雪月花」や、保育園のように「きく、ゆり、ひまわり」とするか。さらには花札めくが「梅に鶯」もある。「天地人」も悪くはないが、いっそのこと「いろはにほへと」はどうか、江戸の火消しも「いろは48組」だったというし、「四十八手」という技もあるから、これが良いかもしれない。

こうしてみると符号としては、甲も乙もまんざらではないように思えてくるから不思議である。だが、この件を今の様々なタブーまで広げて考えたら、それこそ夜も眠れなくなるだろう。そろそろこのあたりで手を打ちたいものだが・・・。(木)

■ ウルシかぶれ 7

ところで、以前にヌルデのことを書いた中で、この木のことを「カツノキ」とも言っていると書いた。この木は以前このあたりでも「死者の杖」として棺の中に入れたというのだが、魔除けといっても触るとかぶれるような木を、なぜわざわざ杖に選んだりしたのだろうか。もしかして、触れるとかぶれることを子供らに教えるために、忌むべき「死者」と結びつけて特に注意を喚起したのだろうか。

このカツノキのことなのかかわからないが、「可頭の木」と表記されたものが『万葉集』の「東歌」の中に出ているというので調べてみた。その歌は岩波書店の『日本古典文学大系』(S35年刊)によれば3432番で、

足柄の 吾を可鶏山の 穀の木の
吾をかづさねも 穀割かずとも

というのだが、その元の表記は、

阿之賀利乃 和乎可鶏夜麻能 可頭乃木能
和乎可豆佐祢母 可豆佐可受等母

となっており、「可頭乃木」、あるいは「可豆」である。これを先の『体系』では「穀(かじ)の木」と解し、歌の大意として、

足柄の可鶏山の穀の木ではないが、私を誘って下さいな。穀の木を割かないでも。

を欄外に載せている。

その「カジの木」は主に西日本にあるせいか、このあたりでは見かけない木である。クワ科で表皮は楮などのように紙の材料に使われ、写真で見ると葉の形も桑に似ており、諏訪大社の神紋にもなっているという。

一方で、「可頭の木」を「カツノキ」と読み、ウルシ科の「ヌルデ」と解釈しているものがあり、ネット上の植物図鑑の「ヌルデ」の項にも先の東歌を引き合いに出しているものがある。そればかりか小学館の『日本古典文学全集』(S48年刊)の中には、

カヅノ木はくわ科の落葉小高木カヂノキの音転かとする説のほか、うるし科の落葉小高木ぬるでとする説もある。

という記述がみられる。

さらに岩波書店では平成4年に『新日本古典文学大系』を出すのが、この中では、

「かづの木」も未詳。カヂノキの転か。またヌルデのことか等々、諸説がある。第四句・第五句も未詳。口語訳が付けられない。

としており、前出の『大系』との間には明らかに解釈の変更があると思われる。

これは後日の研究の結果によるものだろうが、歌の大意を「口語訳が付けられない」として載せていないのは、前の「大意」が誤りだったからなのか、読む方が迷わないだろうか。「わからない」ことは別に「恥」ではないだろう。ただ、自社が以前に刊行した出版物との関係は、訂正も含めて大事にすべきではないだろうか。

実際、このあたりでも「カツノキ」のことを縮めて単に「カツ」という言い方はしないから、「可頭乃木」は「カジの木」とする方が妥当なのかもしれない。それよりも「ジ」と「ヅ」は耳で聞いた限りではほとんど同じように聞こえる音で、土地の訛りが重なればなおのことだろう。

遠い万葉の時代において歌は文字以前に声であり、音だったという見方に立てばどちらの文字に書き留められたとしても不思議ではない。今もって書かれた文字のみから詮索するのは、私たちの悪しき習慣なのかも知れない。(川)

■ 「冬虫夏草」のこと

先日、所用があつて貝生の工藤君のところに行った折、近くの山で採集したという「冬虫夏草」を見せてもらった。ガラスの小瓶の中には焼酎につけられたカメムシ(屁くさ虫)が数匹いて、その何匹かから白い糸のようなものがモヤシのように伸びている。話によると、死んだカメムシの体内にいた菌が後に成長したもので、正確にはキノコの仲間なのだという。

「冬虫夏草」自体が極めて珍しく、貴重なものでもあるだけでなく、これにはいろいろとおもしろい話もある。また、庭先には人の背丈の数倍に育ったハゼの木があつたが、これもこのあたりではめずらしいものである。共に折をみて写真でお見せしたいと思っている。(草)